



ながれる季節の  
なか  
で……

七緒  
みく

# story 1

---

\*1

スタンドグラスからこぼれる陽の光に一瞬、目がくらむ。  
秋の柔らかな日差しとは対照的に、館内はいつものように静まり返り、私の足音しか響いていない。  
両手いっぱいの本を抱えて、私は颯爽と通路を渡っていた。  
馴れた作業だけど、未だに知らない本を発見することがある。  
膨大な量の本たちは、時として私に人生の重みを諭す。  
通路を三つ横切り、さらにその通路の奥地まで足を伸ばす。  
そこはこの時間になるとスタンドグラスの陰影が、  
雲間からこぼれる太陽の陽のように、薄暗い通路を輝かせている。  
わざわざ通勤時間のかかるこの図書館を仕事場に選んだ一番の理由はこれだった。  
初めてこの図書館に足を踏み入れた時、  
まるで、教会や美術館かなにかのような美しいスタンドグラスに目を奪われた。  
多くの本を扱う場所は、陽の光で本が傷まないように、  
どうしても館内が薄暗くなりがちで、故に陰気くさい雰囲気は漂ってしまう。  
でも、ここは大きな窓にスタンドグラスをつけることで、  
その日差しを和らげ、窓に対してすべての本棚が直角に配置することで、  
眩いばかりの色彩が、遮られることなく館内に注がれていた。  
あの時からここは私にとって、どこよりも安らげる場所となった。  
ここは、私に仕事以上のことを学ばせてくれる。  
「志保さん…。」  
スタンドグラスの光の中、ぼっとたたずんでいた私は不意に現実に呼び戻された。  
「すみません。今いいですか？」  
「いいよ。」  
腕の中に残っていた最後の一冊を棚の中に押し込むと、  
彼の後について受付に戻った。  
「発注しておいた本が届いたん出すけど、登録ってどうしたらいいんですか？」  
「じゃあ、まず発注表と誤りがないか確認してくれる？  
後は順番に指示するから、一緒にやりましょ。」  
「はい。」  
一ヶ月前にここへ配属が決まった彼は、物覚えが悪いのか、慎重派なのか  
正直、仕事の手際が悪い。  
でも、そこをカバーできるくらいおらかな人柄が私の怒りをかき消すのだった。  
「仕事、楽しい？」  
黙々と本と会話をする彼の横顔に話しかけてみる。  
どこことなく、本というよりももっと活発なことが似合いそうな彼には、  
ここでの仕事は退屈なのではないかと思うことがある。  
彼はふっと笑って本から目を上げた。  
「そうですね。まだ楽しむところまでは…。でも、嫌いじゃないですよ」  
嫌いじゃないか…。  
「志保さんは？ 馴れてしまつてつまらないなって思うことないですか」  
「う～ん。ない、かなあ…。考えたことないけど。」

彼に視線を投げ掛けると、すでに彼はまた本へと視線を戻していた。  
結局、その後は会話が続き私たちは仕事に没頭した。  
彼と打ち解けるのは、まだまだ先になりそうだ。

休憩時間、私はコートを羽織って図書館裏にできたばかりのカフェに足を運んだ。  
片方のポケットにはお財布を突っ込み、もう片方には携帯を入れた。  
普段、食事に出る時は持って出たりしないのに、  
彼を一人残してきたことが気がかりで、思わずポケットに忍ばせた。  
「いらっしやいませ。お好きな席どうぞ」  
二十代に成り立てと言った、まだどこことなくあとけなさが残る店員が  
私を店内へと招き入れてくれた。  
コンクリートうちっぱなしの店内はモダンそのものだったが、  
木材を上手く組み合わせて、その冷たさを感じさせなかった。  
ここなら図書館の次に、落ち着いて本が読めそうだ。  
私は本日のランチをオーダーして、椅子に腰を下ろす。  
携帯には、メールが届いていることを知らせるランプが点滅していた。  
中身を見なくても誰が送ってきたメールなのか、私には分かっていたし、  
今さら内容を見なくても、だいたい察しは付いた。  
彼とは、もう二週間くらい会っていないだろう。  
それどころか、電話もしていない。メールもほとんど無いに等しかった。  
もともと、電話もメールもそんなに好きでなはないし、  
彼もそれは十分よく理解している。  
それでも、彼が私と連絡を取りたがっていることは知っていた。  
「お待たせしました。ランチセットです」  
可愛いプレートにたっぷりとのった食事が、食欲をそそる。  
つかの間、私はすべてを忘れあたたかな食事を楽しむことにした。